

暗黙知について

Regarding tacit knowledge

山縣 弘子

Hiroko YAMAGATA

Key words: 暗黙知, 発見, 実存的背景

目的と方法

病いの発覚から月日が経つと、病気に詳しくなっていくのは成り行きとして捉えられ、負担の大きい問題には気づかないよう制御される。そして、不安を感じる予測はいつも、書き換えられるようになる。

本論考は、再生不良性貧血の患者である私自身の経験から見た、暗黙知との掛かり合いを描くストーリーであると同時に、ほとんど見られない問題が起こると、どうなるのかというテーマがある。とりわけ、先を読んでから否認をしようとする、すなわち予期に対する抵抗について明らかにするつもりである。

結果と考察

マイケル・ポランニーは、『暗黙知の次元』の中で、発見についての予期を次のように記している。

「(1) 発見を触発して導く場は、より安定した構造の場ではなく、「問題の場」である。(2) 発見が起こるのは、自然発生的ではなく、ある隠れた潜在的可能性を現実化しようと「努力」するからである。(3) 発見を触発する、原因のない行為は、たいてい、そうした潜在的可能性を発見しようとする「想像上の衝動」である (1)。」

私の場合、治療が始まる時まで、めまいや出血傾向が度々起こるようになり、症状を見抜こうとして意識過敏になりがちであった。また正確な診断がされないうちから、徴候を見抜く感覚もあったため、まだ私以外の人は知らないような些細な変化が見えてきたのである。例えば入院の5ヶ月前から、病状が悪化していることを知っていたのである。自宅でポテトチップスを食べ始めた直後に口の中を傷つけてしまったり、ある日、自転車に乗っていてめまいで倒れることが目にとまったのである。その他にも、健康に見せようとして好都合な予測に夢中

になったが、そこから時に、困っているにも関わらず気づきたくないという欲求が生じることは、「不都合なアイディアの否認とその限度を巡る葛藤」へと展開していく動機以上に、思考パターンを抑圧するようになったのである。

しかし、こうした暗黙知に対する打消しのプロセスが、明日へ向かうヒントを失うこと、あるいは満足しながら予期を捨てようとしていると、知覚に対する掛かり合いによって心と身体にも影響することに気づいたのである。こういった暗黙知の消失は、発見を推進しようとする過程の中で生み出された恐怖心の反映なのである。

言葉にできない認識から発見を志向しようとインスピレーションを形成するのは、暗黙的なものによって検証された可能性に関与しながら、楽観的思考の断片を内在化する時である。病いを実存的背景という観点から見れば、日常生活との関係からつくられる推測を信ずる必要があるし、そうした試みには、病いの現状を理解するために思考の軌跡を持つという課題も含まれるかもしれない。

注

(1) マイケル・ポランニー. (高橋 勇夫訳) 『暗黙知の次元』筑摩書房, 2009, p. 147.

参考文献

- (1) パトリシア, ベナー/ジュディス, ルーベル. (難波 卓志訳) 『現象学的人間論と看護』医学書院, 2000.
- (2) A・クライマン. (江口 重幸・五木田 紳・上野 豪志訳) 『病いの語り——慢性の病いをめぐる臨床人類学』誠信書房, 2003.
- (3) S カイ トゥームズ. (永見 勇訳) 『病いの意味——看護と患者理解のための現象学』日本看護協会出版会, 2001.